

2x545

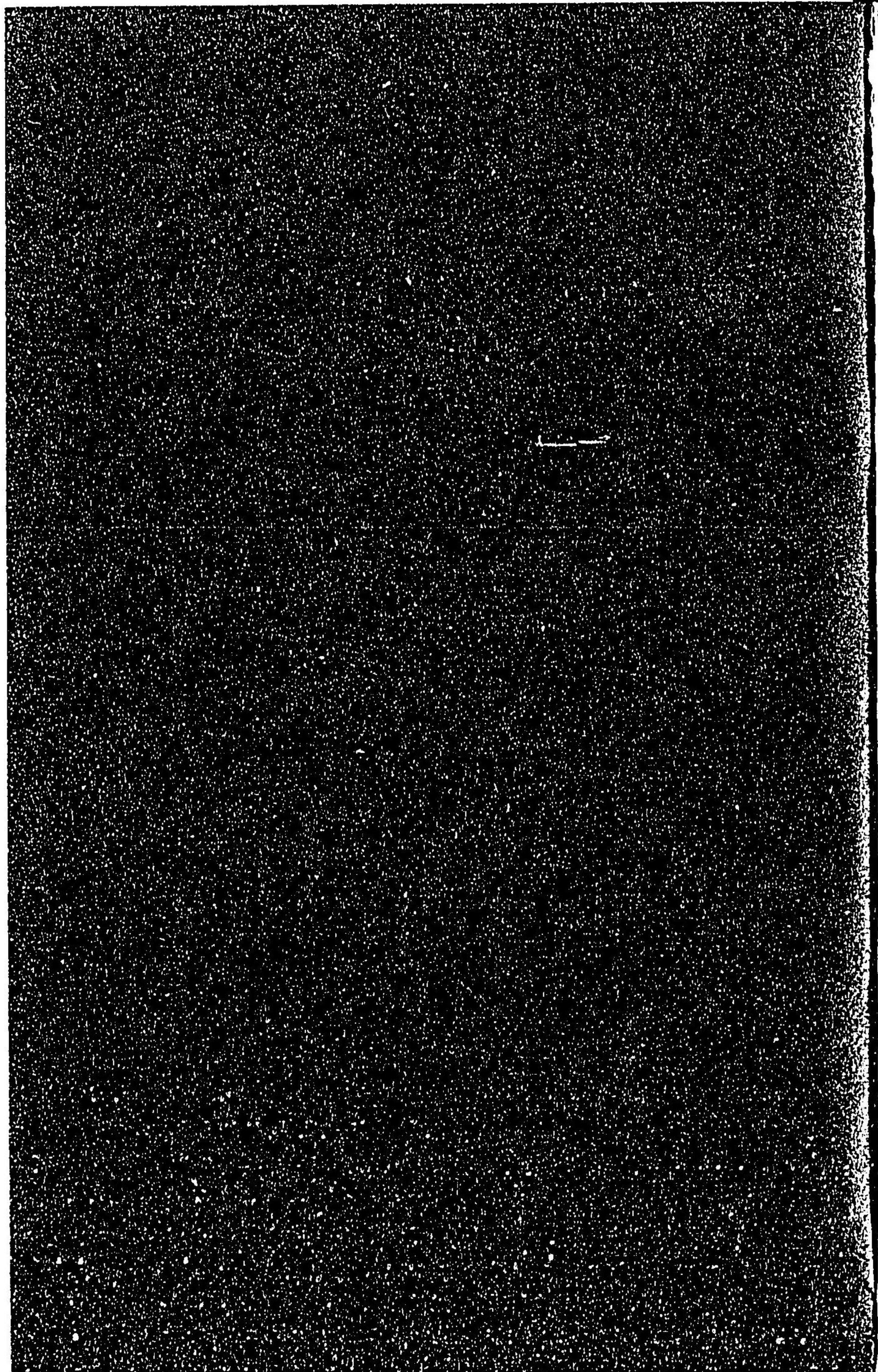
161
278

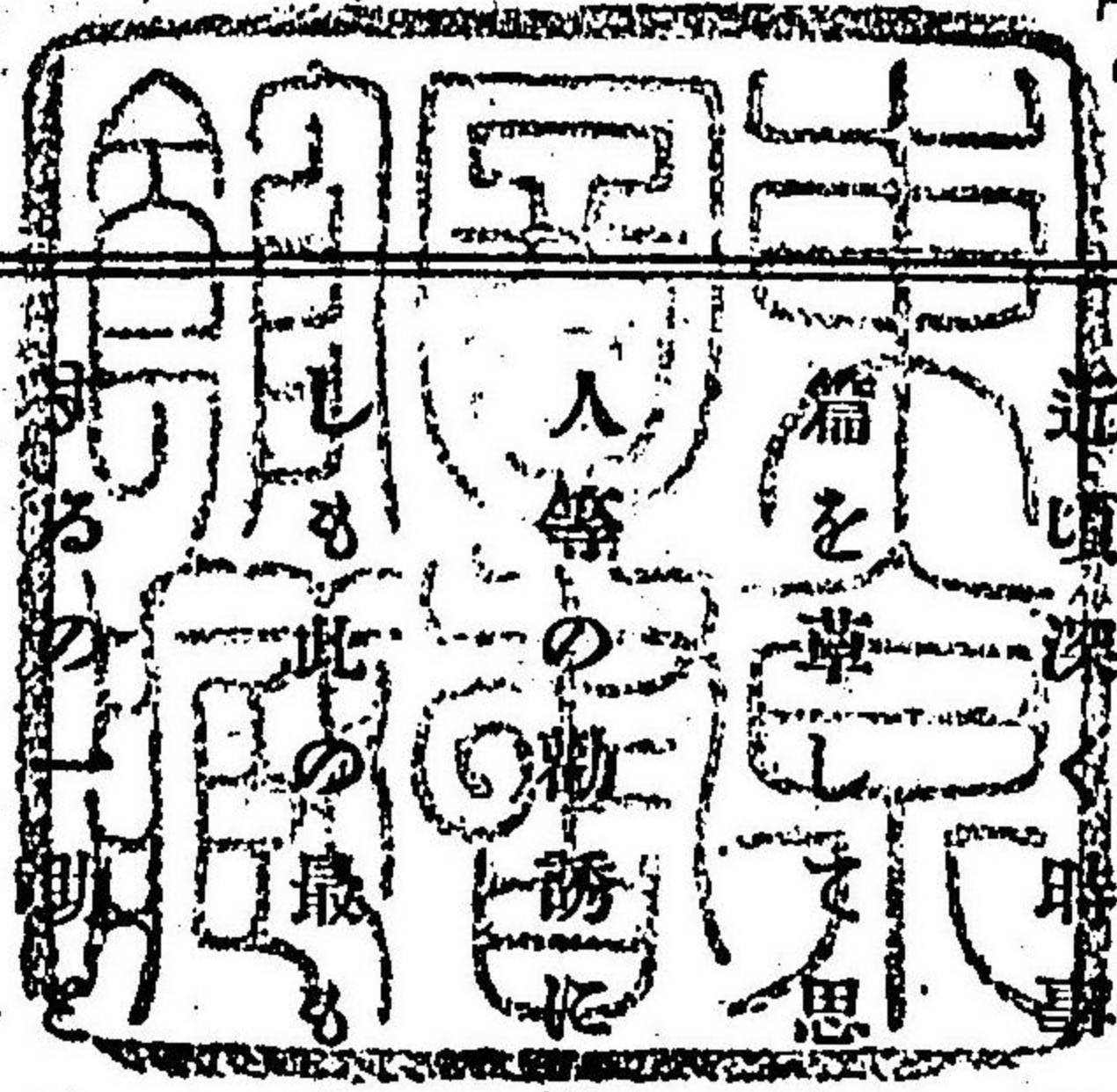
横井時雄著

宗教上の革新

東京

警醒社書店





緒言

近頃深く時事に感ずるものあり、すなはち宗教上の革新七
 篇を草して思を述へ以て基督教新聞に登載せしか、茲に友
 人等の勸誘に従ひ別に小冊となして世に公にせんとす、も
 重大にして切迫なる問題に關し輿論を喚起
 するものなり、もなれば著者の希望以て足れりと謂ふべし



宗教上の革新

目次

第一回 日本従來の風教……………一

第二回 今代道徳上の情態……………八

第三回 儒教と佛教竟に復興す可らす……………一五

第四回 帝國ローマと新日本及び基督教……………二四

第五回 宗教上宇内の大勢……………三二

第六回 現今の時勢は根本的的改革を要す……………三八

第七回 傳道當路者の覺悟……………四五

以上

宗教上の革新

横井時雄 著



1

日本従來の風教

三四十年已前の我邦風教上の有様を察するに三個の
 宗敎儼然として存在して邦人の道徳と宗敎の事を擁護したり、神道佛
 教、儒教、即ち之を
 神道の事に付ては世人動もすればその宗敎上及び道徳上の功績を認
 むるに苦む甚敷に至つては幾んど皆無となす、是れ一理なきに非ず、若
 し其の功績を論ずるの點よりして看れば我國典は佛教に及ば
 ざることを千萬と謂はざるべからず、又若も人倫五常を説て道徳の重
 べきことを唱ふるの點よりして看れば我國典は儒教に及ばざることを

第一回 日本従來の風教

千萬なりと言はざる可らず然りと雖ども是故を以て神道は我邦人の
 道徳に取つて功績なしと云ふは甚しき妄斷と謂はざるを得ざるなり
 國典は即ち國典なり帝室の尊崇すべきことを教へ忠臣孝子の紀念す
 べきことを示し日本といふ榮光ある理想を掲げ以て昭代の今日ある
 を致せしめしは果して誰の功ぞ佛教固より與つて功なきにあらず儒
 教固より與つて功なきにあらず然りと雖ども神道の功は偏へに此點
 に在つて存すと謂つべきなり

佛教の功

佛道に至つては其道徳を論ずるや消極的なり其社會を觀するや厭世
 主義なり其人生の理想を示すや虛無寂滅を以てす然りと雖ども本邦
 未開の時代に當つて文明の技術を輸入せしことの如きは佛者の與つ
 て力ありしこと亦た否むべからず風塵の外に超脱し名利の外に隱逸
 し以て塵世の外かに高潔なる生涯のあるを示せしが如きは蓋し直

接に道徳上に於ける佛教の功績と謂はすんばあるべからず彼の寺院
 なるものを觀よ其數實に幾十萬を以て算へたり日本全國中到處に
 之あり而して築造の結構規模の宏大轉々人をして區々子々たる俗生
 涯の外に逍遙するの想あらしむ其境内庭園の清潔にして塵芥一點を
 存せざる人をして自ら清高の胸涯を想はしむ要するに佛寺なるもの
 は活きたる詩歌ともいふべく我國人に向つて普通の生涯の外に一種
 高等なる生涯のあることを掲げ示したり之れに加ふるに幾多の名僧
 智識は戰國時代の猛烈なる人心を和らげ國政に參與して百年の長計
 を案じたり冥々の中世道人心に裨益せしこと容易に測り盡すこと能
 はず而して其普通人民を教化するの任務を帯びて方便門を説き人心
 を嫌して律義なる方向に向はしめたるが如きは豈に大功にあらずと
 云ふべけんや

第一回 日本従来の風教

儒教に至つては其日本道徳に於ける功績は最も直接にして積極的なりしなり、四書五經は即ち我邦中等以上のバイナルの一言の下たには如何なる猛き武士も羊の如くなつて服するが如く、四書五經は我邦人に取つて無上の權威を以て道徳を教へたり、日本の大學たる昌平黌には孔子の像を安置し、毎年其祭典を行へり、而して儒者先生なるものは即ち仁義忠孝の最も智識ある最も有力なる説教者にして各藩の城下を始めとし、寒村僻地に至るまで其教を擴張して止まざりしなり、其有様は例へば基督時代に猶太に學者なる階級ありて到る處にシチゴク(會堂)を設けて舊約の教を説きしが如く、又現今の西洋諸國に於て教會の牧師等が國中到る處に散布して道を説く有様に髣髴たり、吾人は實に我邦の道徳をして今日の有様にまで進ましめ、我國家をして今日あるを得せしめたる所以のものは儒教の功最も多きを思はざるを得ざるなり、加之封建の制度は即ち名分を明かにし、廉恥を貴び責任を重ずるの精神を以て其生氣とあせり、士人が身にかへて貴しとしたるものは名節なり、故に一舉一動常に死を期して以て事をなせり、彼れ帶ぶる所の大小は賊を殖す爲めに帶びたり、其賊は身の内外を撰ばざりしなり、若し不幸にして賊自己にあるを知らば、渠れ自殺して始めて責任を完ふすべきを信ぜり、吾人は今ま理論を喋々せざるべし、偶々近日の讀賣新聞に一の適例あり、論より證據此一例を掲げて以て封建時代の精華を示さんと欲す、

慶長十八年徳川家の代官大久保石見守長安の死後、生前の悪事露顯なして遺族ども悉く罪科に處せられし時、信州松本の城主にて八万石を領せし石川玄蕃頭康長(伯耆守數正の子)も其の罪に座し、城地を

第一回 日本従来の風教

第二回 日本從來の風教

没收し流請に處せられたり康長の譜代家老に渡邊金内とて祿千石を領し、戦場の數をも履み度々の武功もありて、其名も世間に知られしものなりしが、今度主家の斷絶に其身浪人して松本の近在に閑居なし三人の子を相手にわびしく暮しけるに、諸大名中より之を召抱へんと或は千石二千石とさまゝの祿にて招かれし中、加州侯よりは三千石賜はらんと云ひ越前侯よりは五千石にてと申入られけれども、金内は我々蕃頭殿の御恩を忘れ、更に主取せんこと本意にあらざとて辭退なしけり、然るに或日伊達政宗より態々使者を差越し一萬石にて召抱たき由を申入られけるに、金内是をも辭退に及びたりしが、其翌日に至り行水をつかひ衣服をあらためて三人の子を呼び我切腹いたさでは叶ひがたき子細あり、最後の盃せんと云ひけるを子達聞てこは血迷ひたまひしにやと大に驚きけるを、いやとよ我い

さゝか心の亂れたるにあらざ、只今切腹と覺悟極めたるは餘の儀ならず、其方共も存ずること、此程諸大名中より不肖の我等を高祿にて招かせたまひつるは、誠に以て忝なき次第ながら、我々蕃頭殿の御厚恩を被ふりし身にて再び他の主君に仕へんこと、忠義の道ならず、たとへ何程の高祿にてと招には應ずまじく思ひ極めたりしに、昨日伊達殿より一萬石にてと申されしを聞し時、我等が本知には十倍の祿若しも是程のものゝあらんには、いかばかりか子孫のためにもよろしからんと思ふ心になりたり、扱々人の心ほどあさましきはなし、既に二君には仕へまじとの決心も利祿と聞て、忽ち心の動たるは、吾と我心には、づかしく、此上長く生きたらんには、いかなる變心のいできたるまじきにも、あらず、終には我々蕃頭殿御恩を忘るゝに至らん、いッそ死なんこそよけれと思ひ極めたり、其方達も追付主取すべき

第一回 日本從來の風教

第二回 今代道徳上の情態

身の上なれば努々忠義を忘れて父が名を汚すべからずと訓戒なし
遂に切腹して死したりける、

以上は是れ王政維新以前に於て風教を維持したる所以の要素なりし
なり之れありしが故に幕府を倒し、開國維新の大業を成就するを得た
り之ありしが故に立憲政体の端緒を開くことを得たり之ありしが故
に急激の大改革を行ふて猶ほ國家を傷はざるを得たり然りと雖ども
今や吾人は不幸にも唯だ過去の事として是等の事を論ぜざるを得ざ
るなり現今の日本には既に是等の事あることなし而して其憫れなる
情態に至つては請ふ次回に於て聊か之を論ぜん

第二回 今代道徳上の情態

維新中興の革命は實に開國以來最大未曾有の革命なりしなり吾人も
し歴史其他の革命を看れば多くは亂世の中に秩序を生じ或は一政府

を倒して之と同一なる新政府を設立すると云ふに過ぎず例へば頼朝
が幕府を鎌倉に開くが如き尊氏が政廳を京師に開くが如き其他織田
氏豊臣氏の如き新陳更替の間殆んど何等の革新を見ずといふも可な
り彼の徳川氏が幕府を江戸に開き政權を大阪より奪ひ去りしが如き
一大革命には相違なしと雖も其主義方針に至りては依然として變ぜ
ず頼朝より家康に至るまでの間大凡そ五百年人文の進歩工藝技術の
發達大に見るべきものあり此故に各政府の機關に於ても亦た簡易よ
り精密に進み單純より複雑に入り徳川氏の封建政略を以て頼朝の封
建政略に比するときは殆んど別天地の觀ありと雖もその主義と方針
とに至つては殆んど大差あるを知らざるなり、
之に反して維新の革命は從來の革命と大に異なるものありしが如し徳
川氏の末路に當つて我邦は實に封建制度の完全を極め禮法格式の十

第二回 今代道徳上の情態

二分の發達を見たり、二百五十年間、西洋各國の最も急激なる進歩發達の時代に相對しながら之を雲煙過眼に付して顧みざりしなり、而して維新中興の時に至れば西洋の文明と智識は一時に宛かも連日の雨水を湛へたる大河の堤防を決して平地に注入するが如くして入り來れり、實に維新革命の著しき一點はその破壊的部分にあるなり、蓋し内に在つては從來の制度文物を破壊し即ち幕府を倒し封建を廢し宗教を壞し外に對しては二百年來の鎖國主義を破つて一時に文明富強を恃む所の歐米諸國と交際を開きたり、此故に由て我邦人は此三十年間非常無類の勤勉を以て、時に或は周章狼狽して更にまた幾多の失策によつて如何にもして我國家を振興し西洋諸國に對峙し恥ぢざる文明帝國の光榮を世界に輝かさんことを期せり、故に古風古物其他從來の禮法習俗は更なり、從來の宗教道徳の事に至るまで宛かも敝履を脱ぐが

如く抛ち棄て、亦た顧みざるに至りしなり、或外國人は餘りに改革の急激なるを見て吾人を目して信仰なき輕薄の人民となす、然りと雖ども維新中興の革命は我國民の至誠なる忠君愛國の情に出づ、此三十年間の進歩改革成功皆な我國民が忠君愛國の精神に富めるとを證明す、吾人が改革に急激なりしは進歩の精神に急激なりしが故なり、進歩の精神に急激なりしは愛國の情に深切なりしが故なり、此理由を思はずして漫に吾人を評して輕薄なりと云ふは偶々以て論者自らの輕卒にして淺薄なることを表するのみ、夫れ吾人當代の日本人民は斯の如き改革の大渦中に在つて成長せり、即ち從來の宗教と道徳の廢れて社會の制裁また皆無となりしときに成長せり、去れば従前武士風の極端なる道徳より離れて放逸無主義の極端なる俗流に陥りしことまた怪むに足らず、更にまた吾人は今日の

道徳壞類節操消耗の情態をみて誰をか咎めんや是れ大勢の然らしむる所なればなり然りと雖ども大に警醒の聲を發して同胞兄弟をこの俗風の中より呼び返し忠良至誠の人民たらしむることは豈に今日の最大急務にあらざや試みに眼を放つて少しく社會の情態を観察せよ、弄花事件と言ひ試験問題漏洩事件と云ひ、德育教科書審査事件と云ひ、果して何を證明する、曾て人は言ひき自由制度を執行せば民心直に振興し國家の元氣恢復するを得べしと然るに近來地方自治政を實行したるの結果は如何却つて益々地方の人心を險峻にし從來の好誼を破壊し政務の舉行を妨害するにあらざや是れ果して何を證明する、更にまた全國學生の氣風を看よ滔々たる天下幾百万を以て其學生を算ふ然りと雖ども眞に國を愛ひ民を愛し至誠を以て生涯を貫かんとするもの果して幾人かある彼等の十に八九は即ち名譽利達の爲めに奔走

し權門に媚び社會に陷ふの小人輩に過ぎざるに非ずや是れ果して何を證明する、嗟乎是等のものは果して何を證明する、曰く道徳の缺乏、德育の廢弛、宗教の衰頹を證明するにあらざや、近來に至り德育の問題日一日より重要視せらるゝに至り常路者は德育教科書の爲めには非常の苦心を凝らし居ると云ひ傳ふ、兎も角も小學中學に於ては德育の問題は甚だ八ヶ間敷問題となれり、吾人は當路者の苦心を察す、吾人は先導者の注意既に德育の問題に注がれしを喜ぶ、吾人は德育教科書の數既に十を以て算ふるの多きに至りしことを惡し、とは思はず、然りと雖ども吾人に一の疑問あり、此疑問は益々凝りて解けざらんとす、何ぞや、曰く理論と死したる模範とは果して德育の功績を奏し得べきやと云ふこと之なり、今日の德育問題を解釋せんとする人は蓋し論理を以て道徳の根據を明かにし古來の嘉言善行を

集めて以て道徳の模範を示さんとするものに外ならざればなり、彼等
 以爲らく若し口に道徳を主張し手に最良の教課書を持ち而して學生
 に臨まば昨日の俗人物を變じて今日の道徳家と爲さんと易々たらん
 のみと然りと雖もその結果は最も恐るべき最も惡むべき偽善者、作爲
 的、道徳家を作り出すことこそあれ、決して真正の忠君愛國の人を生じ
 得ざるや明なり、若しも死したる人間は生きてる人物を生ずることを
 得ば、若しも偽善者の教に因つて聖人君子の輩出することもあらば、若
 しも死したる人の書きたる死したる書物が靈妙なる人心を振作する
 ことを得ば、清き水の流は濁れる泉の源より起るを得べく、東西古今の
 歴史によつて吾人が學び得たる所は凡て皆な空なり、彼れソクラテス
 は何が故に道義學の祖先となることを得し、何が故に其門下よりプラ
 トン、アリストートル等輩出せしむるを得し、彼れ孔子は何が故に東

洋二千年間の道學の泉源たることを得し、近くは彼のラッピのアル
 ノルドは何が故に一の中学校長の身に過ぎずして而して斯く多くの
 人傑を教育することを得し、其他フレイベル、エメルソン、中江藤樹、吉田
 松蔭等の如き何に因つて斯く深く人を感動することを得し、凡て是れ其
 心に活きたる道徳の存するあつて而して之を他人の心に發揮したる
 が故にあらざや、至誠は必ず至誠を生む、忠愛は必ず忠愛を生む、信念は
 必ず信念を生む、世の中には心靈的遺傳の法、冥々の中に行はれつゝあ
 るなり、門閥血統の勢に優つて心靈的系統の勢は却て力あるものなり
 然るを俗物を以て眞人物を興さんとし、死物を以て活人を興さんとし
 方器を以て元氣を復興せんとす、嗚呼、是れ何等の拙策而してまた何等
 の見識ぞ、

卓識先見の有志家は今より六七年前既に邦人道德思想の衰頽を歎じ、德育問題を提出して以て天下の注意を喚起せり、僅かに是れ二三の演説若くは論文に過ぎざりしなり、然るに其以て全國民の注意を喚起するを得し所以のものは暗々裏に國民中の最も心ある人々は既に其等の點に付て鋸かに注意しつゝありしが故にあらざや、蓋し我同胞は突然として歐米物質的文明の光輝に照らされ、目眩んで幾んど行路の方針を忘失したる程なりしが、漸くにして視力を恢復することを得、忽ち道德上の壊破宗教上の衰頽を見愕然として驚き、今や偏へに之が恢復策を講じつゝあるなり、德育問題の一時に輿論の燒點を集むるに至りしことまた道理なきにあらざるなり、況んや前年歐化主義の最も盛なるに當つて世の先達者たる數人の人々が大膽にも基督教輸入の説を主張したるが如き固より時勢の感化に由ること少からざりしと云

ふと雖も亦た其心中竊に風教上の缺點を認るの至情に基きしものありしに非ざるなきを得んや、又近來倫理學に關するの著述頻りに出版せらるゝが如き固より之を促す直接の原因別に存するなるべしと雖ども、又これ間接に人心の醒覺を示すの一證なりと謂はざるを得ざるなり、

或人曰く日本人民の道德を恢復するには儒教を復興するに若くはなしと、此說一理なきにあらざ、吾人が既に論じたる如く儒教の我邦人の道德に於ける勢力は實に莫大のものなりしなり、彼れ論者等は多くは三十年以前の狀態を目撃したるの人々なり、然れば彼等が是を慮り彼を思ひ、儒教復興を唱ふる深く同情すべきの理由なきに非ず、而して若しも今日に於てその當時の如く儒教の勢力を盛ならしむるを得べくんば、是れ國家の爲めに大に慶賀すべきの一事たらざんば、あらず、然り

第三回 儒教と佛教竟に復興す可らず

と雖ども時勢は不幸にして論者の希望を實行せしむるを許さざるなり、ミル、スペインセル、カント、ヘーゲルを讀む所の今代の青年は其思想の複雑なる其哲學的傾向の盛なる之を三十年以前の四書五經と史記と日本外史の奴隸たりし學生と日をも同ふして語る可らざるなり、渠等は批評的に四書五經を讀まん、批評的に孔孟の人物を論ぜん、而して或る貴き格言若しくは或る教の一斑に付ては必ず深く敬服する所あるべし、然れども遂に孔孟の書に由りて確信自立するの地歩を得ることはなし得ざるべし、當局者既に之を幾多かの學校に於て試みしに非ずや、而して其成績殆んど稱するに足るべきものなきを見しにあらざるや、蓋し孔孟の教たるや道德の大本を哲學的に論究して以て之を確定せんとするにもあらず、又は宗教的に教へて各人の信念を活動せんとするにもあらず、只だ仁義孝道を説て家を齊へ國を治むるの道を教ふるも

のなり、是故に國民の思想單純にして社會の事また單純なる舊日本の如きには之を行ふを得べしと雖ども既に宇内の新智識を輸入して以て蜂の巢を打ち散らしたるが如く從來の制度文物と思想習慣とを破壊したる以後の今日に於て復び儒教を採用して以て人心を統一せんことは到底なし得べからざるの事たり、是れ第一の理由なり、儒教は或一種の階級の爲めに適用するを得べしと雖も之を國民全體の間に適用するを得べからざるなり、其教ふる所の大部分は即ち身を修め家を齊へ國天下を平かにするの道に外ならず、之を少數の政治家若しくは學者の間に於て唱ふるを得べしと雖も國民の強過半をなす所の婦人老人幼者の間に於て唱ふるを得ざるべし、而して強ひて國民多數の間に唱へんとせば是れ經典中の少部分に限らざるを得ざるべし、言はば宴會に招かれて席に列するを得べきものは十中の一二にして他の八

第三回 儒教と佛敎に復興す可らず

九分通りの人々は其の殘餘の屑を食はしめらるゝに過ぎず、况んや其屑と云ふべきものも鳩翁道話、心學道話等の如きの敎に由つて學ぶを得べしと雖も直接に經典の本文に就ては之を學ぶことを得ざるに於てをや、如何となれば漢文を讀み得て而して經典を理會するを得べき人は自ら少數者たらざるを得ざればなり、此文明開化にして四民平等の實行はれつゝあるの時代に於て果して國民中の八九分は他の少數者の食ひ殘しの屑を食して以て満足するを得べしと云ふを得るか、是れ第二の理由なり、大凡宗敎の盛なるを得る所以のものは先づ其道の善惡に由ると雖どもまた大に之を振興する人物の有無に由るなり、今儒敎界の狀態を見るに經學に精通して道徳ある君子は必ずしもなきにあらざるべし、然りと雖ども如何せん是等の人は多くは既に前代の遺物にして其思想は經學に於てこそ精通なりと云ふべけれ、今代の

新思想に對しては甚だ迂濶なりと謂ざるを得ざるべし、且つや其身既に老ひ、起ちて儒敎復興の任に當らんことは到底希望す可らざるなり、是れ第三の理由なり、吾人は此三理由によつて儒敎到底復興すべからずと斷定せざるを得ず、或る論者は頗りに佛敎復興の爲めに考慮することあるに似たり、佛敎は従前盛運の時に當つては士人の殆んど之を顧るものなき有様なりしが其衰運極まつたる今日に於ては却つて或有力者の間に珍重せらるゝが如し、蓋し是れ困窮極まつて始めて義俠者の腸を動かすに足るものあるによるか、或はまた世間の事益々繁劇となり社會の秩序俄かに壊破に屬して而して或有志家は安心立命の道を求むるの熱心を起すに至りしに由るか、そは兎もあれ、吾人は近年頗りに佛敎復興の計畫盛んなるを見てその成功如何を推究せざるを得ざるなり、而して不幸

第三回 儒教と佛教に復興す可らず

にして佛教また復興すべからざることを思ふ、其理由は即ち(第一)佛教の哲學的なること、或人は近頃頻りに佛教の哲學的側面を指し示して以て世に誇らんとす、是れ蓋し佛教を以て學者の參考品として永く世に保存せんとするには一の好方法なるべしと雖ども之を國民の宗教とせんとする爲めには、譬へば樹の枝に登り坐して而して樹の幹とそとの坐する所の間とを鋸を以て截斷する人に似たり、枝の幹に離るゝ所以は自ら地上に墜落する所以なり、或る種類の學者は佛教の哲學を喜ばん、然れ共到底少數者たらざるを得ず、多くの人は哲學の講究に生涯を送ることを好むものにあらず、去れば(第二)彼等は方便門に歸依して安心せんとするか、奈何せん彼等已に方便門の方便門たることを知り、電信郵便鐵道は學者等の新説を齎らして東西南北隅より隅に至り寒村僻地も亦た平然として竟に方便門の中に甘睡するを許さざらん

とす、何人か己の無學に自得するものあらんや、何人か己は下等の人間なりと諦らめ安んずるものあらんや、殊に苟も小學校にある少年男女に取つては智識上に於ては天下第一の學者と平等ならんとを期す、方便門決して永く國民の信心を收むるを得ざるべきなり、(第三)佛教には不幸にして幾十万の僧侶あり、吾人は今日僧侶の數多きを以て佛教の不幸と云はん、とす、何となれば是れ佛教の有志家をして改革の事業を成就するを得ざらしむる大障礙なればなり、夫れ數十萬の僧侶は多く破戒僧なり、好し假令文字上に於ては未だ宗規を破らずと云はんも其精神上に於ては既に之を破れり而して宛かも一人の義士が百方の賊軍を歸順せしむる能はざるが如く、數人の有志家は遂に數十萬の僧侶を奮發興起せしむる能はざるべし、彼等は其演説に於て其論文に於て先づ何を云ふか、先づ佛教家の腐敗を云ふて攻撃を避けんとするにあ

第三回 儒教と佛教に復興す可らず

らずや、然らば彼等は先づ佛教家の状態を改良せざるべからず、而して後始めて世間に向つて佛教擴張の手段を施すを得べきなり、然れ共彼等が内部の改良を計畫しつゝある間に世は更に又た廿五年を經過すべし、嗚呼、佛教の復興豈に得て望むべけんや、

第四回 帝國ローマと新日本及び基督教

今より二千年の昔キリスト教が始めてナザレの預言者の口より宣傳せらるゝや、宛も是れ芥種の小なるが如く一細事に過ぎざりしなり、夫れユダヤは小國なり、ローマ大帝國を組織する數十の國民中最も小にして最も勢力なきものゝ一なりしなり、而してその小國を以て自ら宗教上に任ずると尤も深かりしことは反つて他の總べての民族より、殊にローマ府民より甚だしく嫌惡せられ其果ては到る處に世人より輕蔑せらるゝの原因となりしなり、然ればユダヤより起り、ユダヤ教の一

基督教の
起原

ローマ帝
國と基督
教

派として指目せられ、且つ信徒の自負心に至りては却てユダヤ教徒よりも甚しかりし所の基督教豈に帝國人民の輕蔑と敵對とを免れんや、然るにその一度ユダヤの國境を脱して帝國の大舞臺に打つて出づるや十字旗の向ふ所天下に敵なく實に破竹の勢も音ならざる有様を以て弘布し未だ三百年を出でざる中に遂に總ての偶像教派を撲滅し總ての哲學派の勢を挫き去りて帝國を統一する所の唯一の宗教とはなりにき、是れ果して何の理由に由て然るか、此問に答ふるは即ち我日本に於てキリスト教の弘布せざる可らざる所以を述ぶると同一の事なり、

熟らゝ當時の状態を観察するに彼れローマは素と一市府より興つてイタリヤを統一し 그리스を呑み進んで東はユーフレチス、タイグリスの河邊に至り、西はスペインの海岸に至り、北は今の佛國を経て大

英國諸島に及び、南は即ちエジプトの最南境よりアフリカ大陸の北岸を併有せり、而して彼れ征伐に征伐を加へ、日に月に新なる版圖を開くに從つて、ローマ固有の制度文物風俗慣習及其宗教を破壊し去つて殆んど其精氣を殘さざるに至りしなり、加之帝國の晩年頽りにゴス、オストロゴス、ホンス、ヴァイシゴス等の北狄蠻人の侵寇するあつて、ゴールの佛の東境イタリヤの北境及びダニユーブの河濱幾百千哩の邊境一日として戦争の絶ゆることなく、而して帝國政府は遂に或る北狄蠻人中より軍隊を募集し其勇武の力を借りて他の蠻人の侵入を防がんとするの策を取りしかば茲にまた蠻人軍隊なる一の新らしき要素を帝國社會の中に加へ來つて從來の制度文物遂に全く其勢力を滅し去るに至れり、斯の如くなるを以て是非とも新たに帝國的世界的宗教の起るありて當時の人心を統一せざる可らざるの時運に迫れり、而して當

時幾多の宗教あり哲學派ありと雖ども多くは是れ數百年を経たる地方的の宗教若くは哲學にして遂にこの複雜を極めたる大帝國の唯一宗教とあつて人心を統合し得るものはあざりしなり、唯だ獨りキリスト教は當時の總ての宗教總ての哲學の精華を自ら備へたるものにして竟に時の勢に乗じてローマ帝國を教化し了れり、例せばソクラツト、プレトリーの唱へたる唯一神と、マルコス、オウレリオス帝及びエピクテトスの如きストイック學派の唱へたる嚴正高潔なる道徳と偶像教の特有なる熱心なる敬虔と崇拜とを自ら一信仰の中に含有するものは即ちキリスト教なりしなり、之に加ふるにキリスト教は階級を以てその領分を限らずして老幼貴賤の區別なく智愚貧富の區分なく總ての人に其道を普及することを得たり、即ち使徒パウロが幾度も唱へたる如くキリスト、イエスに在りては自主と奴隸の區別なくユダヤと異

邦人の區別なくクリシヤ人と野蠻人の區別あらざりしなり、唯だ一の單純なる福音の道を以て學者を教化し無學者を教化し文明人を教化し野蠻人を教化し總ての人を教化して力餘りありしなり、唯一の信仰を以て當時幾十百の言語民族を包有し尙ほ餘あるを得るの特性は一帝國政府を以て天下萬國を統治したるローマの特性に髣髴として更に大なるものありしなり、去れば此の如き宗教を以て當時の勢に乗ず、その傳播して帝國の唯一宗教となりし亦た怪むべからざるなり、今吾人は現今我邦を以て當時のローマ帝國に比較するに事情の甚だ相似たるものあることを認めずんばならず、内にあつては從來の制度文物及宗教を悉く破壊し外に於ては歐米の新智識を輸入するの勢宛も堤防を決して大海の潮を注入するが如く、而して世界列國の形勢悉く其變動の餘響を我國に及ぼさざるはなく殊にアヲヤ大陸に對する

邊境は日一日より甚だしく不穩の狀態を示し來る、何ぞ其の事情の帝國ローマと甚だ似たるの甚しきや、而して從來の諸宗教悉く勢力を失ふて人心繫ぐ所なく、切に一大宗教の起るあつて國家中興の元氣となり民心を統合するの要素となるを待望するの狀態又た何ぞ夫れ相似たるの甚だしきや、キリスト教豈に弘布せざるを得んや、キリスト教を措て外に此時勢に應ずるを得べきもの果して何者かある、近頃或論者はキリスト教を攻撃してその個人的道德を説くを以て本邦の事情に適せざるものとなせり、若しも今日の日本をして三十年以前の前日本たらしめば論者の説また一理なきにしもあらず、然りと雖も社會は疾に進歩して舊來の封建制度を蛇が皮を脱するが如くして脱し去れり、今日の日本は舊時の日本にあらざるなり、又た人力を以て之を従前の日本に復歸せしむ可らざるなり、論者等は豈に法律の研究に

多忙にして宗教上道徳上一大劇變のありしを注意せざりしか、何ぞ其の説の時勢に迂濶なるの甚しきや、去れば今日の日本は從來の如く國家は家族を以て組織し人の子たるものは嫡男として父の家を繼ぐかさもなくば人に養はれて他の氏姓を冒すか、若しくは特例により新家を興さしめらるゝか、然らざれば容易に一人前の權利を持つことを得ざりしが如き有様にはあらず、男子たるものは何時にても新らしき家を興すことを得べく女子と雖もまた一家の戸主たることを得べきなり、且又た帝國憲法の發布せられ自治制度の實施せられて以來國民は參政の權利を得て獨立自由の身となれり、此の如き場合なるを以て我國民の宗教とならんとするものはその教の本旨に於て個人的ならざるべからず、個人的とは即ち一個の人間として天に對して責任を持ち人類に對して責任を持つといふの意味を指して云ふなり、未だ國家

あらざるの前すでに道徳なかる可からず、未だ他人あらざるの前すでに宗教なかる可らず、是れ吾人が人として先づ以て考へざる可らざる必要事なり、吾人は内に省みて耻づる事なく天に對して恐るゝことなき精神を養ひ以て國家的家族的社會的の道徳を行はざる可らず、如斯して始めて新日本人民の安心立命は起るべく、國家的道徳は立を得べきなり、今佛教は出世間の道なり、然れどもその天に對する責任を説くが如きは甚だ不十分なるの憾なき能はず、是れ實に佛教の一大欠點なりと謂ふべし、儒教は社交的國家的の道徳を説く、然れども竟に封建時代の臭味を脱する能はざるなり、而して兩教共に既に頽廢して復た興す可らざるは吾人が前回に於て已てに論じたるが如し、然れば今の時に於て佛儒の精華を兼有し加ふるに其欠點を補ふべき要素を具備する所の基督教は是れ即ち新日本の宗教たらんとするものに非ずや、

第五回 宗教上宇内の大勢

第五回 宗教上宇内の大勢

熟々眼を放つて宇内の形勢を觀察するに宗教の事終に一に歸せんとするの形勢甚だ明白なりと謂ふべし若し夫れ未だ基督教の恩澤に沐浴せざるところの民族を數へ基督教に反對するの諸宗教を數へ其多數なるを思はば傳道の問題容易に解釋す可らざるに似たり然りと雖も數の多少は必ずしも戦ひの勝敗を決すべきものにあらず若し人心の和睦を得て而して地形の便利を占むるに於ては少數の兵以て多數の兵に勝つこと易々たるのみキリスト教が他の諸宗教に對するの地位蓋し稍々之れに似たるの觀なき能はず今や新舊兩約聖書は既に數百の國語に翻譯され世界の各國到る處にキリスト教の傳道師を派遣し幾千百の新聞雜誌及び他の書籍を出版して以て宗教の眞理を説明し大舉して印度支那土耳其日本其他の異教國を教化せんとするの

勢は實に猛烈を極むと云ふべきなり之に加ふるにキリスト教はその本據を歐米の文明國に置き更に南方アフリカ、マダガスカル、アウスマツリヤ、洲、其他南洋諸島を以てその外壘となし以て異教の諸國に當らんとするの勢あり是れ豈に人心已に和して而して亦た地の利を占め得たるものにあらずや、去れば亞細亞諸邦の傳道たるや困難は即ち困難なるに相違なしと雖もたゞ是れ歲月多少の論に過ぎずして其竟に成功せんことは吾人が斷じて疑はざる所なり我が日本はその國體に於て萬國に比類なきのみならず其他の點に於ても各國に對して秀絶する諸點少しとせず然りと雖も吾人また世界の列國中の一國のみ奚んぞ竟に宇内形勢の歸着せんとする所に向つて反抗するを得んや、イエスキリストの名は現今世の最も高潔にして博愛なる總ての事業

第五回 宗教上宇内の大勢

と總ての思想を代表する標號なり列國兵を止めて平和親睦するの日を來らせんとして努むる萬國平和會議なるものは果して何人の主張するものぞ、奴隸の賣買を禁止して飲酒の弊害を杜絶し風俗の腐敗を矯正し以て正義公道の支配を天下に布き及ぼさんと務むるものは果して何人ぞや、赤十字社を組織して敵味方の區別なく戰場の負傷者を救はんとするものは果して何人ぞや、資本と労働の争論を實際上に鎮定し國民教育の問題を解釋し且つ家庭の安全と潔白を維持せんとして勤勉するものは果して何人ぞや、是等の志士仁人は多くは是れキリストを信じキリストの名の爲めに勤勉するものに非ずや、さればイエス、キリストと云ふは一宗教の祖師たるのみならず今や人類の最も高潔なる思想と最も尊貴なる事業を代表するの名とはなれり、豈に皇天イエス、キリストを立て、以て萬國の民族とその總ての分離とを統一

せんとするにあらざるなきを得んや、左れば若しも我日本人がキリストを信じ其名に由て國家を興さんとするに至らば豈に是れ善く天意に配するの處置と謂はざる可けんや、基督教の我邦に傳はる漸くにして三十有餘年に過ぎず其の會員の數亦た三万五千を過ぎず、歲月實に久しきにわらず人員實に多きにわらず、然りと雖もその已に我國民の間在つて威望を負ふの高きことは吾人が最も注意を要するの一事と謂はざる可らず、世人が或人を指して彼は宗教家なりと言ひて而して心竊かに之を尊敬するある所以のもの、は彼等がキリスト教を尊敬するの心あるとを證するに足るなり、近頃教育社界に於て頻りにキリスト教徒を誹謗し之を排斥せんと勉むるものあるに至りしが如き偶々以て渠等が已にキリスト教の勢力を恐るゝに至れるを證するに足るなり、佛教已に壞額して儒教また一

第五回 宗教上宇内の大勢

の文藝となり了りぬ宗教上より言は、我同胞の念は日々に益々不安
 心と失望落膽とに陥らんとするの傾あるに際し獨りキリスト教徒は
 不完全ながらにも此間に於て永遠の大道を懐き人生の方針を知つて
 希望と勇氣に充つ、是豈に大に注意すべき事にあらずや譬へば日已に
 西山に没して海面次第に暗黒に蔽はれつゝあるに際し懸崖絶壁の上
 に立てる一燈臺の光は次第にその輝きを加へて以て長程の航海者を
 迎ふるが如し、今の時に當つて本邦道徳上の革新を計らんとするもの
 キリスト教に依らずして將た何に依らんとするか、
 吾人は近頃頻りに愛國を唱へ忠孝を説く者の多きを加ふるを見て常
 に國家の慶事と思惟せり、我邦人の道徳心は未だ全く磨滅し去らざる
 なり、國家の前途尙ほ大に望む可きものあるなり、然りと雖も吾人また
 彼の愛國を唱へ忠孝を説く人に向つて一の助言なき能はず、渠等は果

して時勢を誤解するものに非るなき歟、渠等は愛國を唱へ忠孝を説け
 ば輒ち以て國民の道徳思想を喚起するを得べしとなす、然りと雖も不
 幸にして時勢は渠等の希望を許さざるべし、如何となれば吾人現代の
 日本人は是れ三十年前の日本人にあらず、吾人は多少の哲學思想を養
 へり、故に必らず事に當つて其理由を聽かんことを要す、何故に愛國す
 べきか、何故に忠孝すべきか、是れ現時の日本人の心竊に思議するの問
 題なり、而して若しも此問題に對して満足なる解釋を與ふることを得
 ずんば夫の愛國を唱へ忠孝を説くもの、業は徒らに水泡に屬し了ら
 んのみ、何ぞ空砲を放つて敵を殺さんとするものと撰ぶ所あらん、今吾
 人はキリスト教は眞に満足なる解釋を此難問題に向つて與へんこと
 を信ずるなり、何故に國を愛すべきか、曰く是れ世界の列國中に在つて
 一大文明國を建立し眞理と道徳の光を放つて以て萬國の民を利益せ

第六回 現今の時勢は根本的の改革を要す
 んが爲めなり、何故に君父に事ふべきか曰く是れこの君父を吾人に賜ひし天の聖旨なればなり、言を換へて之を言はば吾人若しキリスト教に由て上帝と天道とを信ずるを得ば國民としては日本の天職を知り個人としては君に忠にして親に孝なるの所以を知るを得べきなり、語に曰く天に順ふ者は興り天に逆ふものは亡ぶ、宗教上宇内の大勢すでに斯の如し、日本帝國豈に獨りキリスト教を奉ぜずして興ることを得んや、

第六回 現今の時勢は根本的の改革を要す

天下改革すべきの事業今日の如く多きはあらず、政治改革せざる可らず、風俗改革せざる可らず、學制改革せざる可らず、法律改革せざる可らず、商業改革せざる可らず、文學改革せざる可らず、是れ實に吾人現代の國民が熱心に希望する所なり、其の期する所は即ち英米獨佛少くとも

天下改革
すべきと
多し

世界第一等の列國に比肩するの位地に進達せんとするにあり、夫の保守國粹を唱ふるものゝ如き、最も改革急進の潮流に背馳するが如しと雖もその期する所は同じく是れ現今の日本をして世界第一等國たらしめんと欲するに外ならず、急進と漸進と稍々趣を異にするが如しと雖もその期する所は即ち一而してその改革を必要とするに於てもまた一なり、然れば改革は邦人全體の希望なり、四千万人中現今の日本國を以て完全無欠にして改良進歩を要せずとなすものは一人もあらざるべし、而して若しも改革を要するの事業を一々枚擧し來れば殆んど數限りもなき多きに至るや必せり、
 去れば吾人は實に斯く多くの改革事業をなすを要す、彼の歐洲人が三百年を經過して就成したる文明の進歩をば吾人は之を三十年の間に成就せざる可らず、多事もまた甚しと謂ふ可し、豈に一時一刻の休息宴

第六回 現今の時勢は根本的の改革を要す

安を容さんや、東に奔せ西に走り新聞に演説に著述に翻譯に人々その思ふ所を吐露しその企つる所を實行せんとし其狀眞に狂するが如し大小前後の區別なく何も角も同時に提出して評議討論す故にその喧噪なること、その紛雜なること、その急忙なること、その不定なること、宛も神田明神の祭禮に似たり、

此時に臨み吾人は一の臆を記臆するを要す曰く急ぐ蟹は穴に入らずと、吾人若し混雜と喧噪を以て明治維新の終局に非ずとし空論壯語徒らに水泡を吐ひて止むは我國民の素志に非ずとなさば須らく今日に於て改革の順序を講究すべし、物必ず前後本末あり、その本亂れて而してその末治るものはあらず、源泉濁つて而して末流の清らかなるものはあらず、新日本の改革事業素よりよし、吾人は凡百の改革事業に向つて一の反對あるなし、然りと雖ども其目的を達せんとするには此に根

本の大改革を施して以て他の凡百の改革をして其の基く所あるを得せしめずんばある可らず、根本的の改革とは何ぞ、曰く宗教上道徳上の改革即ち之なり、

今夫れ道徳と宗教との問題は既に前回に於て論したるが如く我國人の尤も注意する所の問題とはなれり、是れ實に過去二十五年間の經驗に於て邦人が實驗したるの結果に非ずして何ぞや、吾人は幾多の失敗の後ち漸くにして警醒し而して道徳と宗教の事は國家生命の因て繋がる所にして凡百の改革の因つて起る所なるを知ることを得たり、されば宗教上道徳上の革新は他の幾多の改革事業中の一事業として勉む可きものにあらずして却つて是れ他の凡ての改革事業の根本として勉めざる可らず、本立つて而して道生る、若し今日に於てこの根本的改革を就成せずんば假令へ吾人は凡ての他の改革の爲めに如何に熱

中盡力するも遂に其功なくして盡く空に歸せんとを恐るゝなり、グラ
 ッドストローム屢々英國人民に告げて曰く政治上幾多の改革を要する
 ものありと雖どもアイルランドの自治案を議定し了るまでは何事を
 も着手するを得ず自治案は即ち他の凡ての改革案の前途を遮断する
 ものなりと吾人は現今の時勢を觀察して深く此言に同感なき能はず
 政治固より改革せざる可らず文學固より改革せざる可らず學制固よ
 り改革せざる可らず軍制固より改革せざる可らず然れ共その改革の
 事業多くは未だ満足を與へざるのみならず前途果して満足なる改革
 を成就し能ふや否や是れ即ち最も責任を重んずる有志家の精神を暗
 く裏に麻痺するの思想たらざるを得ず蓋し宗教道德の改革は他の凡
 ての改革案の前途を遮断するが故にあらざるなきを得んや國民の希
 望と信用とを繋ぐを得べき政治家の起らざるは何故ぞや百世の睡眠

を覺破すべき文豪の起らざるは何故ぞや徳育上の方針一定せず教育
 界の腐敗一洗するを得ざる所以のものは何故ぞや是れ豈に天を畏れ
 義を重んじ道に立つの信念遂に我邦人の中に於て幾んど全く消耗し
 了りしに歸因するなきを得んや去れば我邦人精神上の衰弊は即ち他
 の凡百の弊害の因つて起る所なるや明白なりと云ふべし若しも今日
 に於て先づこの精神上の衰弊を一掃して之れに更ふるに敬天愛人積
 極的に正義公道に立たんとするの精神を喚起するに非ざれば凡ての
 改革事業も竟に徒勞に屬し水泡と消え了らんのみ
 慶應戊辰の頃に當りてや天下の形勢は日々に益々衰弊を極め公武の
 間柄隔離益々甚だしく外國の脅迫日々に猖獗を加へ而して時の大政
 を執る幕府は因循姑息遂に天下を一新するの大策を立つると能はず
 して三百の諸侯各々その向背に迷ふてまた歸する所を知らざりしな

第六回 現今の時勢は根本的改革を要す

り、此時に當り一世の豪傑なる西郷隆盛斷じて曰く日本中興の策は幕府を倒し政權を朝廷の有に歸し以て天下を統一するに在りと、而して斷々として此大目的に向つて辛苦經營したり、伏見鳥羽の一戦に由り幕府に賊名を負はせ錦旗を翻へし天下に號令し東征軍を發し江戸城を抜き越後を討ち會津を亡し箱館の賊を滅し而して維新中興の基礎を成せり、若しも之れに反して此の根本的改革を施さずして一局部の改良に従事し破綻を續し猜疑を和解し徒らに小局部の事に區々として五六年も經過せしならんには遂に天下の事亦た奈何ともする能はざるに至りしや明なり、今日の事豈に甚だ之れに類することなからんや、儒教固より取るべき所多し、佛教また實に輕んず可らず、二教は誠に我邦人に取りては千幾百年間の恩人たり、然りと雖も此の二教が今後の人心を救ふ能はざるは恰かも徳川幕府が二百五十年間の歴史の

威權を以てするも遂に國家を救ふ能はざりしと同一一般なり、吾人は斷じて佛教儒教の代りに基督教を擴張するの策を一定せざる可らず、吾人は勉めて因循姑息の小政策を除き幾多の所謂改良事業の爲めに精神を奪ひ去らるゝことを避け而して根本的大改革を斷行するを要す、嗚呼今日の要はそれ只斷の一字にあるかな、

第七回 傳道當路者の覺悟

吾人が前數回に亘て論述せし趣意を畧言すれば今や我國は第二維新の時、宗教上大革新を要するの時に迫れり、即ち守成の時に非ずして革命の時代なり、平和の時代にあらざして騒亂の時代なり、今の時に當つてキリスト教傳道の任に當るものは當にこの時世に處するの大覺悟なかる可らず、例へば以多利建國の三傑ガリバルデー、マシーニ、及カプー、ルが千辛萬苦を嘗め經營慘憺幾たびか敗衄を取り幾たびか死を決

第七回 傳道當路者の覺悟

し而して殆んど意外にして其事業を成し遂げしが如きは即ち是れ革命的の事業にあらざや、またワシントンが北米十三州の殖民軍を率ゐて獨立の大擧をなすや、轉戦七年の久しきに及び兵器食糧の盡きしと果して幾回なるを知らず、人民兵亂の長きに失望して徵兵を拒みしと一回に止らず、股肱帷幕の將校にして節を變じて英軍に通ずるものもたなきに非ず、此間に當り唯だ獨立軍の名分赫々として光を日月と争ふを得べく正義の神は必ず此義擧を祐助するに相違ある可らずといふの一大信念を抱きて終にその志を成就せしが如きは即ち是れ革命的の事業にあらざや、近くは我が維新の前後に當り海港を開き國家を一統し以て日本中興の基礎を確定せんとして東西に奔走し或は刺客の手に斃れ或は海中に身を投じ或は商家に形を隠して家僕の勞を取り若くは幾回か慷慨の腸を寸断するの耻辱を忍び而して遂に維新の

日本傳道の困難古今比類なし

大業を成就したるが如きは是れ即ち改革的の事業にあらざや、日本傳道の事業はその困難なること、その必要なること決して國家的革命の大事業と稱するに耻ぢざるなり、佛教が始めて我邦に渡來せし時には殆んど無宗教の國民の中に渡來したるなり、儒教が始めて我邦に渡來したる時には是れまた無學の人民の中に渡來したるなり、故に日本國民の信用を得歎心を得ること、もまた頗る容易なりしなり、其の他各國の例を引かば、概近に於てキリスト教がフイソ、ハワイ、マダガスカル等の諸島に始めて傳はるや、一種の困難ありしに相違なしとす、るもまた是れ單純なる困難と云はざる可らず、彼等は裸躰にして人を食ふの野蠻民族に過ぎずして、恐る可きはたゞ彼等の迷信と猛惡なる舉動との二者ありしのみ、若しも熱心と好意とを以てその猛惡なる心を宥むることを得、而してまた單純なる理論を以てその迷信を開くを

得ば加之基督教の高尙なる教と歐米諸國の榮爛たる文物とを以て追
ることなれば、此野蠻人種を教化するの事業は易々たりしのみ、其他ド
イツ人、フランス人、イギリス人等が始めてキリスト教を信ずるや彼等
はまた無學なる北狄蠻人たりしのみ、固より幾多の困難ありしと雖も
一たび單純なる理論を以て若くは熱心なる傳道を以て彼等の歡心を
得るを得ば以後の成功は水の下きに就くが如く易々たらざるを得ざ
りし也、之に反して現今の日本は文明の日本なり、或る種類の事に於て
は遙かに歐米人に劣るところありと雖も又他の種類の事に於ては
我邦の文明は歐米に優るの點も少しとせず、殊に宗教的思想の高尙な
る懷疑的思想の跋扈する禮儀作法の複雑なる或は歐米に劣らざるな
り、而して國民の多數尙ほ未だ佛教の支配を全く脱し得ざるの時に當
りこの國民を教化せんとするの事業は殆んど前古無比の大事業と謂

はざる可らず、キリスト教會の歴史中之れと性質を同ふするものは纔
かにローマ帝國を教化せしことの一例あるのみ、夫のサバナローラが
フロレンスに興つて宗教改革を唱へたる如きは僅かに是れキリスト
教會の弊習を盤革せんとするに過ぎりしのみ、ルーテル、ツィンツリー
、ロヨン、ナツクスの事業の如きまた是れキリスト教會を改良するの事
業たるに過ぎず、現今吾人の目前に横はる處の日本傳道の事業とは頗
る其趣を異にする所なき能はず、吾人が任ずべき宗教革新の事業豈に
夫れ偉大ならずや
之に加へて日本傳道の困難に付ては尙ほ一の注意すべきことあり、即
ち吾人は本邦從來の宗教に對してキリスト教を傳播せんとするのみ
ならず、吾人はまた西洋に於けるキリスト教從來の思想慣習を改革す
るの任を負ふこと之なり、若しも日本傳道の時機をして今より五十年

の己前にあらしめば恐くはこの困難は殆んどあざりしならん然りと雖も十九世紀の末端に當り西洋の神學思想が前古無比の大革命に遭遇したるの今日に於て吾人はキリスト教を我國に傳播せざる可らず吾人は西洋の革命的思想はキリスト教に先つて已に學識ある本邦人士の心に侵入せしとを記臆せざる可らず吾人は此革命的思想は即ち上帝の使命を帯びて世に起りしものたるを記臆せざる可らず故に吾人は西洋のキリスト教會に於けるが如き漸進的改革を以て甘んずること能はずして彼等に先んじて改革を果斷決行する所なかる可らず而して之れと同時に二千年の間西洋諸國の人民を活動し來り十九世紀の今日に於て愈々益々元氣を振ふて二十世紀の歐米社會を活動せんとしつゝあるところのキリスト教の生命をば少しも傷つけずして保存せんことを勉めざる可らず此に至つて吾人の事業の困難なる

ことまた極れりと云ふべし事情已に斯の如きが故に吾人は謹んで現今の傳道當路者に向つて一大覺悟あらんことを請求せざるを得ざるなり吾人が過去三十年に於て成し遂げたる事業の如き即ち現今の日本教會各派の狀態に於て見るを得べしと雖ども要するに唯だ是れ一の見識たるのみ今日の各派を維持しその漸次の發達を計り而して今より二十年の後に於て三四十のキリスト教派を見西洋的儀式慣習の繁昌を見而してその會員の數を問へば二三十萬に過ぎずといふが如きを以て吾人は果して満足するを得べきか嗚呼皇天上帝か我黨を擇んで以て囑托せし事業は果して此の如く夫れ小にして微なるものか吾人は須らく此に大に猛省せざる可らず

昔はマセドンの王アレキサンドル年僅かに二十にして父王フィリッ

アの位を承ぎしが幾何もなくして彼父志を追續してベルンヤ征伐の軍を起す、その將さに發せんとするや從來の版圖を分割して悉く之をその舊故重臣に與ふ驚て問ふものあり曰く王は自ら何の所有を餘し玉ふか、此に於てアレキザンドルの答は即ち彼がアレキザンドルたる所以を示せり、彼曰く我は一の希望を有すと、嗚呼日本傳道の任に當らんとするものまた此の如き大精神なくして可ならんや、吾人が有する多少の名望吾人が占め得た多少の權力果して夫れ幾何の價かある、若し之を見て羨然たる人あらば來りて之を取るべし、斯く計りの小事業を以て足れりとする人は何ぞ日本傳道の大事業を與に語るに足らんや、

去れば吾人は此に傳道事業の偉大なること、其の必要なること、その困難なること、その機會の已に來れること、を深く熟考し而して

アレキザ
ンドルを
引く

從來の小成功の如きは已むとなくんバ之を敝履に比して以て遠く將來を希望せざる可らず、吾人が日本に於て成就せんとする事業は前古無比の大事業にしてその成功は即ち使徒パウロの成功より完全ならんことを期せざる可らず、吾人の任や重く其途や遠しと謂ふべし、此等の事を深く思念して而して前途の經綸始めて一定する日は即ち吾人の洵に謙遜なるの日、洵に確信なるの日、而して日本傳道の事業の始めて開達する日なるべし、吾人は皇天上帝に向つて其日の速に來らんことを祈りて止まざるなり、

宗教上の革新終

明治廿六年二月二十七日印刷
明治廿六年二月二十八日出版

版權所有

著者

東京本郷區東竹町三十五番地

橫井時雄

發行者

全京橋區出雲町一番地

福永文之助

發行所

全京橋區出雲町一番地

警醒社書店

印刷者

全京橋區西紺屋町廿六番地

島連太郎

賣捌所

大坂西區土佐堀三丁目

福音社

日本の道德と基督教

横井時雄 兩氏合著 定價八錢
原田助

國會新聞評

我國民の道德思想を縱論横議して痛快雄絶、望むらくは此書を刀水の源流に浸しせめては其一滴なりとも今日の社會に充滿せる信仰もなく道念もなく精神もなく氣骨もなく而かも饒舌なる偽善なる輕薄なる腐腸動物に飲ませたきものなり

日本新聞評

封建の制度廢れて我邦人の思想は舊來の慣行より分離し、搖蕩して洋上の舟の如し、宜しく基督教を以て之が舵とすべしといふもの此篇の骨子なり、著者の所奉に忠實なる感す可し、著者又謂へらく忠と孝とは日本三千年の道德の二大標準なり、而して基督教は亦忠と孝とを重せり、故に基督教は國風に反撥せずと著者苦心の在る所なり、基督教を取りて必らず日本の基督教となんせは基督教徒たる者此意を存せざる可からず、其方便や巧、而して余は其巧に與せんなり。

寸鐵評

今や我邦人は第二維新則ち道德思想の革新の境涯に起てり、而して道德思想の基本と爲る可きは、何くにかある是れ熟慮すへき問題にあらずや日本の道德と基督教は眞に之を考究論述せり

國民之友評

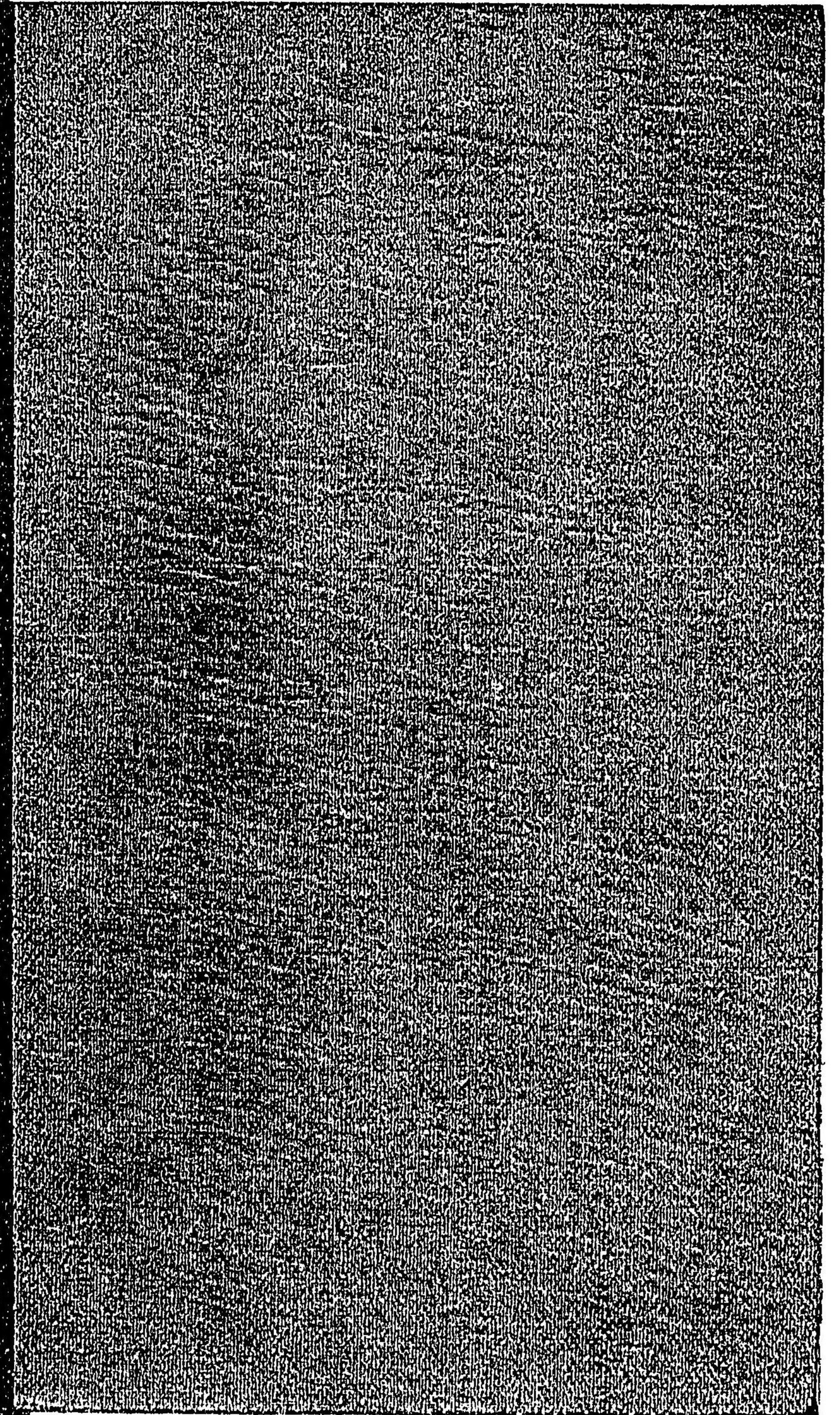
日本の道德と基督教は道徳革新の潮流に乗じて以て日本の趨勢を決せんと期するもの、現時我國宗教界に大名ある横井、原田兩氏の懷抱を公にしたる也、中に日本人民の徳育問題、忠孝と基督教、國家主義と基督教、日本從來の徳道と基督教、徳道の修養に於ける社交の勢力等の好問題あり有益の好著述と謂ふべし

發兌

東京々橋區出雲町一番地

警醒社書店

2X 545



禁
複
写

013613-000-2

特29-764

宗教上の革新

横井 時雄/著

M26

ABA-0082

